

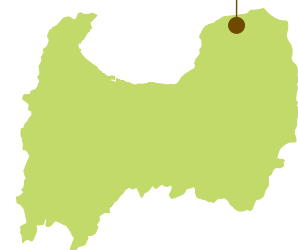
女性の目線を活かした“楽しめる農業”で、地域農業を元気にする

株式会社 Staygold てらだファーム

※2018年3月現在

代表者名	寺田 晴美	資本金	3百万円
設立年	2015年1月9日	売上高	30百万円(2016年12月期)
事業内容	生産(コメ、大麦、野菜)、 消費者直売、加工・製造、 作業受託	経営規模	田28.5ha、生産施設1,450㎡、 加工施設13.2㎡(仕出し)
従事者数	6人(うち女性4人。女性内訳:役員2人、一般職2人)		
女性活躍	[女性に配慮して取組んだ環境整備]		
支援	施設設備関係(休憩室・屋内トイレ)、重労働等の業務改善		

富山県下新川郡
入善町



経営概況

富山県の北東部、日本海に面した入善町は、北アルプスを源とする黒部川水系の水で育ったコシヒカリの産地。ほかにもラグビー型の巨大スイカ「入善ジャンボ西瓜」や、粘り濃厚なサトイモなどの特産品がある。2015年設立の株式会社 Staygold てらだファームは稲作をメインに、サトイモやスイカなど地域特産品からプチヴェールなどの新野菜まで、多彩な野菜を栽培する。メンバーは代表の寺田晴美氏と、79歳で現役の父・寺田喜一氏と母・増子氏の3人が役員を務め、ほかに女性社員が2名、常勤パートの男性の1名で構成される。女性社員のうち、一人は地元農業高校出身で2016年に入社。学校でトマト栽培を

研究した経験から野菜作りを担当している。もう一人は2017年に入社した晴美氏のいところで、農業初心者ながらも農業機械の特殊免許を取得し、喜一氏とともに米作りに取り組む。晴美氏は生産から営業までマルチにこなし、テレビ取材や講演会の出演を積極的に受けるなど地域農業のPRにも貢献する。こうした女性の活躍で設立から3期連続の右肩上がりでの伸長。野菜の品目と生産量が増え、2018年度は農業高校卒業の男性社員も加わる。

1. 経営者の理念・意識改革

専業農家の長女である晴美氏は、幼い頃に農業を手伝うものの農業は苦手で、高校卒業後は一般企業に就職した。しかし40代の2006年、年老いていく両親を放っておかず、実家を手伝うことになった。ところがこの時点でも農業が好きになれず、苦手な農業を好きになって楽しく仕事をしたいと、野菜ソムリエの資格を2008年に取得。娘を持つ母である晴美氏はもともと料理が得意で野菜も好きだったことから資格を取るのは楽しく、これが転機となり、農業が興味深い仕事に変わっていった。父の代からサトイモやネギを作っていたが、晴美氏が入ってトマトベリー、パブ



リカ、スティックセニョール、プチヴェールなどの新野菜が次々と加わっている。

もうひとつの転機は2013年に、規格外の芋や親芋などで大量に廃棄されるB級品のサトイモを活用したコロッケ「さとっころっ」の製造であった。“捨てるのはもったいない”という主婦目線から生まれたコロッケは県内のイベントなどで人気となり、現在は女性農業者のグループ「百笑一喜」のメンバーと毎年3万個を製造・完売するまでに広がった。

2. 地域の女性農業者が活躍できる場をつくる

「さとっころっ」は当初、晴美氏と母、友人の3人で作っていたが、客の好反応を見て売れることを直感した。そんな時、地元の女性農業者が集まる「真樹の会」のメンバーに「コロッケをいっしょに作らん？儲かるし、楽しいよ」と声をかけたと言う。

『「真樹の会」には私のような農家の娘や、農家のお嫁さんが多く、家の仕事をたまに手伝うものの、他に何をすればいいかわからない、自分を活かしていきたくない女性がたくさんいました。まるで昔の自分を見ているようで、『この子たちがもったいない、農業でもっと楽しくさせてあげたい』という思いになりました』と晴美氏。2014年、地域の30～40代の女性農業者で「百笑一喜」を立ち上げ、冬の農閑期を利用して週に2回、地元のJAみな穂の調理室で冷凍コロッケの製造がスタート。町内外のイベントやJAみな穂の直売所「あいさい広場」での冷凍販売を行っている。1年目が終わった時、「本当に楽しかった！こんなに楽しい場所へ連れてきてありがとう」とメンバーに言われ、自身も感無量だったという。

この活動が認められ「百笑一喜」は2017年に富山県農業振興賞を受賞。コロッケ作りが転機で新事業を立ち上げたメンバーもあり、晴美氏の後進が育っている。

3. 女性目線の農業に取り組む

晴美氏の取り組みのひとつに「廃棄野菜ゼロ」がある。最初に規格外の野菜で何かできないかと組合に相談すると、男性農業者から冷たい反応を受けたという。が、やってみなければ分からないと、栄養価が高いが廃棄されるプチヴェールの外葉に注目。ペーストや粉末状の「青汁」に加工すると、直売所で人気となった。夏に大量に収穫したトマトは湯むきして真空パックで冷凍保存。11月頃から直売所で販売すると、おでんや鍋の具として好評だという。ほかにもB級品野菜はペーストにして販売。加工済みだから調理しやすく時短につながり、忙しい主婦には重宝するアイデア商品だ。

「カラフルな野菜を作って料理する女性を喜ばせたい」と、トマトは8種、ナスは11種と新品種の栽培にも取り組む。色鮮やかな野菜はシェフにも好評で、県内有名ホテルの料理長が直接畑まで買いに来るなど、自社ブランドの知名度を上げている。そんな女性目線の農業を行う晴美氏は、今や男性農業者からの信頼も厚く、地元初の女性農業者のリーダーとして地域農業を活気づけている。

審査委員の声

“新しいことをやる” “捨てない” がキーワードの寺田晴美さん。パワフルだけど聞き上手でソフトなお人柄だった。「楽しいよ、儲かるよ」と語りかけ楽しむ姿に触発され、新たな栽培方法を始めた地元女性農家さん、てらだファームに新たに就職した女性たち。印象的だったのは、女性が情報交換の部会出席や勉強を重ね外に出る大切さ。情報をもとに自分がやりたいことが明確になると、挑戦が自然と始まる。県や農協のサポートを得ながらひとりの女性が地域に貢献していく姿に刺激を受けた。